

第3講 富と徳の合一の精神：最初のアメリカ人ーベンジャミン・フランクリン

1 生涯

Benjamin Franklin, 1706-1790

2 フランクリンの「教育思想」と実践

(1) 『貧しきリチャードの暦』（1732年に発刊、以後1758年版まで続刊）

リチャード・サンダーズは、フランクリンの創造した架空の人物
フランクリンがねらったもの。

富への道と徳への道の合一により、幸福な人生を目指して絶えず向上しつつある、まじめで正直で、職業的に有能な産業中産階級的な人物像。

1758年版に掲載された富へいたる道 **The Way to Wealth**

リチャードはいつまでも貧乏であってはならない。

「墓場ではいくらでも眠りがある」のだから、生きている間は「仕事を追い、仕事に追われてはいけない」。

この世で成功するためには、勤勉と節約に努めなければならない。

少しの贅沢も「一つの小さな水漏れが大きな船を沈めることになる」。

小さな出費にも気をつけるべきで、「不必要なものを買えば、やがて必要なものを売らなければならなくなるだろう」。

(2) 科学と経済・仕事観

科学研究

学問的動機も基づくものではなく、植民地の功利主義的な動機による。

仕事観、労働観

労働の目的は、経済的繁栄。

営利を人生の目的とする、端的な近代資本主義精神の表明。

参考、Max Weber 1864-1920の言う、プロテスタント的禁欲倫理に基づく職業的使命感。

宗教・道徳観

『信仰箇条と宗教的行為』 **Articles of Belief and Acts of Religion**

教会に出席しない代わりに、自分で作成した礼拝文。

神の存在、神が世界を創造し、摂理によってこれを治めること、神の嘉し給う奉仕は、人に善をなすこと、靈魂の不滅、すべての罪と徳行は現世あるいは来世によって必ず罰せられ報いられること、こうしたことを疑ったことはない。

教育：アメリカで最初のアカデミーの設立

3 フランクリンの思想の現代的意義（先駆性）

(1) 実学主義（古典主義に対する）

(2) 生涯学習の観点

(3) 個人については、「13の徳の樹立」

「天は自ら助くるものを助く」独立の精神、道徳的完成をめざす。